

《論文》

文学作品に見るスピリチュアルペインの顕れ Ⅱ ——『怪談』が示唆するスピリチュアルペインのやわらぎ——

小林 和夫

はじめに¹

スピリチュアルペイン (spiritual pain) とは、死に近接する人が感じる全人的な痛みの一つである²、とされている。ターミナルステージのやまいで、弱からぬ希死念慮で、あるいは愛おしい人との離別などで死と間近にふれ合うことにより、確固としていた（はずだった）自己の継続性、一貫性、同一性が危機に瀕する。すなわち「わたし」がゆらぐ。激しくゆらいで、自らの存在や生きるということの[意味]が崩れ去り、あえかなる未来への[希望]は霧消し、これまでの人生を懸けて築いた大切な人や事物、すなわち世界との[関係性]は消えいろうとする。そのとき、あらゆる飾りや衣服を脱ぎ去った裸の自己が問い直される。

すなわちこの「死に近接する痛み」には、究極的な問いが伴うのである。例えば、「私の人生はいったい何だったのか」、「なんのために生きてきたのか」、「どうしてこのような苦しみを受けねばならないのか」、「この痛みに意味はあるのか」などというものである。

さらにスピリチュアルペインの一つの特徴として、「死んだら私はどうなるのか」といった問いに象徴される、死後の世界への堪えがたいおそれが現前する。ただ塵となって消えてしまうのか、それともそこには「何か」、たとえば天国とか、極楽とか、果ては地獄のような別世界があるのか。あるいは輪廻し転生するのか。または肉体の失われた後も魂と呼ばれるようなものとしてこの世にとどまり、今を生きる人たち、愛する人たちの行く

末を見守ることができるのだろうか……。死んでしまった「わたし」がどうなるか、誰も分からない——死後を透かし見る能力があるならさておき——知るよしもない。そこでスピリチュアルペインには、死後の何たるかを含めてあらゆることをすべからず知悉しているであろう超越者、古より人類が、時に在ると断じ、時にありやなしやと疑問し、そもなにものであろうかと考究を重ねてきた存在、たとえば神や神々、仏、靈魂のようなものに向けた問いも必然生じてくる。「神よ、あなたはそこにいるのか」、「なぜ私を見捨てるのか」、「死んだら仏になれますか」などという問いかけである。

これらスピリチュアルペインに伴う問いは、ゴーギャンがその代表作の一つに記した題名に集約されるかもしれない。すなわち、『我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか = *D'où venons-nous ? Que sommes-nous ? Où allons-nous ?*』（1897 年）³ である。そこに腑に落ちる明察など、残念なことに存在しない、であろう。いわば、答えのない問いを問い続ける苦しみこそが、スピリチュアルペインそのものであるかもしれない。

スピリチュアルペインには定型もない。あらゆる痛みと同様、それはさまざまな顕れとなり、表現となり、程度も、深さも、長さも、幅も、奥行きも、頻度も、人それぞれの特殊な体験（体験それ自体が、そもそも個別、特殊ではあるが）として現在する。

私は先だって、芥川龍之介の『歯車』を手がかりにした論考のうちに自死とスピリチュアルペインの相関を看取する試みを企図⁴しており、本論はその流れを汲むものである。

今回私は、いわゆる『怪談』という範疇に入る文学作品などを糸口にして、愛する者との死別によって生じるスピリチュアルペインの顕れを見ていくこととする。なお、本論における『怪談』とは、幽霊などの登場する不思議で怪しい話、と定めておく⁵。

I.『さるの湯』に見るスピリチュアルペインの顕れとやわらぎ

高橋の『さるの湯』(2011年初出)⁶は、3・11をテーマとしたアンソロジー、『東日本大震災鎮魂岩手県出身作家短篇集 あの日から』の冒頭に収められた30頁ほどの小品である。著者は「昭和二十二年、岩手県釜石市生まれ、〈……〉昭和五十八年、『写楽殺人事件』で江戸川乱歩賞を受賞しデビュー。〈……〉『緋い記憶』で直木賞、〈……〉盛岡市在住」(以上、『あの日から』著者略歴より)であり、その作品群は、推理、時代もの、ホラー、サイエンスフィクションなど多岐に亘る。

2011年3月11日14時46分に宮城県沖で発生したマグニチュード9.0の地震に端を発する東日本大震災から10年が経つ。自然の猛威や、戦争、テロリズム、あるいは疫病の蔓延などに直面し、文学など、芸術など、何の役にも立たないのではないかと無力感を抱き、または筆を止めて沈思する時を必要とした作家は少なくない。「高橋も震災後、書けなくなった一人である。いざ書こうとしても、震災とは無縁な時代小説を書くのに罪悪感があった」⁷という。

東日本大震災の死者数は1万5899人、行方不明者は2525人⁸、震災関連死も3767人⁹に上る。数ではない。そこに一人ひとりの人生があり、その多くに家族や親しい人たちがいる、ということこそが重要だ。甚大な災害に直面した文学は、だから、霞がかった遠方に膨大な無名氏の残影を映しながら、なお個人個人の生活、そこに内在する痛みや喜び、祈りを描出しようとする。

高橋は、「現代物の短いホラーだけは何とか書けた」¹⁰ そうだが、「奇妙なことに、どんな話を書いても、結局は何らかの形で震災と結びつく物語になるという。常に被災地の問題が頭から離れないがゆえに、どうしても文中ににじみ出てしまう」¹¹ そうだ。そのように紡がれた作品を読み解きながら、そこにスピリチュアルペインの顕れを看取していく。

1. あの世とこの世の狭間における彷徨、あるいは死者たちのスピリチュアルペイン物語は、「妙な具合になっている」¹² という一文で始まる。

主人公の「私」は作者高橋と同様「沿岸部から車で二時間も離れた盛岡に住んでいる」¹³。幼い頃を過ごした海沿いの町は壊滅的な被害を受け、「五百人近く死んでる」¹⁴ 状況だ。この地に残った漁師の父親は、やがて水商売の女と一緒に子を出したが、「私」が「二十歳の辺りに」¹⁵ 海で死んだ、という。震災前から大型家電店のカメラ売り場を担当し、写真に興味を持つようになった「私」は、「何度となくこの町の被災状況を伝えるテレビを見ているうち我慢ができなく」¹⁶ なり、災禍のただ中にある海沿いの町民たちを写真に撮るようになる。そんな「私」の写真には、なぜか死者が写り込むのである。確かに妙な具合だ。

地域青年部のリーダー格である照山という人物が、「私」の噂を伝え聞き、「だれが来て写しても今までこんなことはなかった。あんた魂に選ばれてんだよ」¹⁷ と感嘆して再び撮影に来るようにと「私」を誘う。

作者の高橋自身、いわゆる心霊体験をしている。夜行列車から振り落とされて亡くなった弟の親友 F 君が、まさに事故死の時間、たまたま弟の部屋で寝ていた高橋の枕辺に立った。F 君はその後、幾度も高橋と弟のもとに白い柱のようなかたちで現れた¹⁸ そうで、高橋はこのことをいくつかの短編に著してもいる。また、「私」のように、不思議な写真を映したこともある。北上山地最高峰の早池峰山（はやちねさん、標高 1917 ㍎）に取材で訪れた際、頂上で撮った写真に未確認飛行物体が写っていたのである¹⁹。

「靈魂探しの撮影」²⁰ 当日はひどい雨降りだ。迎えに来た照山は、外の撮影は無理だから、猿が入りに来るような山の中の温泉、一人の老翁が湯守りとして暮らし、「ここら辺りの死人が最期に入る湯だと言われている」

²¹ 「さるの湯」に行こうと言う。同行したのは、照山の他は、若い漁師の

丹野のみである。

麓に到着すると激しかった雨は上がり、眩しいほどの陽光が照りつけている。山を登りながら、照山は、「この町だけでいったい何人が犠牲になった。なにに残されたおれたちが昔のままなら皆の命が無駄になる。死んだ者らはなにもできねえ。だからおれたちが一番にその意味をつけてやらなきゃならねえんだ」（下線、筆者。以下同）と語りかけ、「私」に「この町に戻ってこないか」と訊ねる。8歳の時に母が自死して養護施設で過ごした「私」は、「それ以来まともに人生と向き合っていない。いつも投げやりにして来たのだ。人を真剣に愛したこともない」²²。そのような「私」が、照山の申し出に心揺らぎ、ここでなら何か新しいことができそうな予感を覚えるのだ。他者との関係性がきわめて希薄だった「私」も、照山たちとは協調できそうである。

やがて、樹の間からさるの湯の細い湯気が見えてくる。2人の子どもがリスを相手に遊んでいる。小屋に入ると、死んだはずの佐倉んちのハルばあちゃんたちや、「子どもの頃の私と似た虚ろな目」²³をした若者がいる。

湯守の老爺は、撮影を始めた「私」に、「ここは、さるの湯と言うてな、この世からあの世へとさるとこじゃ」²⁴と告げる。のぞき込んだ自身のカメラの画像モニターには、湯守だけでなく、セーラー服の女の子や、ウエディングドレスの女性、サッカーボールを抱えた少年、白衣の看護師らが映じている。この海沿いの町で、おそらくは津波によって亡くなった人たちだろう。みな笑顔だ。自死した母の姿まで写っている。

泣き崩れる「私」の眼の前で、ハルばあちゃんの体が湯気に包まれ、みるみる消えていく。照山も、丹野も、小屋で遊んでいた子どもも、みなすでにこの世にない者たちであった。照山は言う。「津波が来そうだと分かっていたて車を反転させなかった。おれのせいで丹野を死なせた。だから死んだと認めたくなかったんだろうな」²⁵。そして「私」もまたすでに死んでいることに気づかされる。虚ろな眼差しのあの若者が、「おれ」であり「私」なのである。「私」・「おれ」は、母の死の原因となった父を崖から突き落

として殺し、直後同じ海に身を投じて死んだのだ。

殺して当たり前の親父だと思っていた。それでもおれの腕は固まり、気持ちなど晴れなかった。おれは自分のことこそ殺したかったのだとそのとき分かった。一人で死ぬのが悔しかったのだ。〈……〉／親父なんてなんの関係もなかった。親父のせいだと言い聞かせて逃げていたのはおれだ。／〈……〉親父を突き落とした海に飛び込んだ。／それを忘れていたなんて……。／忘れて無為な人生を繰り返していたのだ。²⁶

「おれ」が父親を手には掛けたのは20歳の時である。湯守が言うには、それからわずか1年あまりしか経っていない。「私はあのまま死んでしまいたくなかった。／生まれた意味さえ分からずに死ぬなんて。／その思いが私をこの世に引き止めた。」²⁷

「おれ」・「私」の希死念慮は、8歳の時に、大好きだった母が自死したことをきっかけに始まったと考えてよい。「それ以来まともに人生と向き合っていない。いつも投げやりにして来たのだ。人を真剣に愛したこともない」²⁸と言うように、生きることに對する意欲はなく、希望は喪失し、人や世界との関係性も崩壊していた。「おれ」は、スピリチュアルペインを強く感じ続け、ついには父を道連れに、自死に至ったのである。

この物語で死後の世界は、2層構造になっている。この世とあの世の狭間にあたる生者と亡者とが混在する世、そして、あの世、とである。

未練、恨み、痛みを抱いている「おれ」・「私」や、死んだことを認めたくない照山たちは、死者でありながら、この世を「さる」ことができず、第1層の死の世界で、あたかも生きているかのようにふるまっている。

照山は、自分のせいで丹野を死なせたという呵責を記憶の片隅に残しながら、せめて死んでいった多くのものたちの死生の意味を見つけなければ

ならぬと思いつめて、生きていた。「おれ」・「私」は、激しいスピリチュアルペインを感じて自死を選んだものの、生まれた意味も分からずに死ぬことを否んで、生き続けた。登場人物が死者であるという設定を除けば、第一層の死世界に生きる彼らは、死に近接する生者が感じるスピリチュアルペインに、同じように苛まれている。死者のスピリチュアルペインである。なんとなれば、死後の世界を知り得ない私たちに、死してスピリチュアルペインから解放されるものかどうかは分からない。

さるの湯は、彷徨い続ける魂たちが、いわゆるあの世、つまり第2層の死へと去るための入り口となっている。

2. 霊的ないやし、あるいは関係性の回復

『さるの湯』が描く虚構世界には、スピリチュアルペインの顕れだけではなく、そのやわらぎ、すなわちスピリチュアルペインのケア (spiritual care) の可能性が内在している。

1年もの間、死してなお虚ろな「おれ」をさるの湯に残して、迷える魂として仮構の人生を生き直していた「私」をこの場所に導いたのは、「あんたが撮影したらどんなもんかと、ふっと思いついたのさ」²⁹と声をかけてきた照山や丹野らである。「あんたのお陰でここにやって来れた」と語る照山もまた、「私」に連れてこられたと言える。

「私」は照山たちを、照山たちは「私」を、互いに導き合って、啐啄同時的に、いま・ここ（「さるの湯」＝「あの世への入り口」）にいる。母の死以来、「まともに人生と向き合」わず、「いつも投げやり」で、「人を真剣に愛したこともな」い「私」に変化が訪れようとしていた。失われていた他者との関係性は構築され始めた。照山もまた自ら死者であることを認め、「おれのせいで丹野を死なせた」という自責から解き放たれようとしている。

やがて「私」は、さるの湯に入ること、この世への執着を捨て去ってあの世へと向かうことを決断する。

なぜなら、「あの V サインをして去った女の子が、あのサッカーボールを蹴って見せた男の子が、あの鉢巻きをしたおばさんが……私を励まし、新しい路へと歩んでいった。／そうして私も勇気を得た」³⁰ からである。つまり、震災で亡くなった人々の霊が、かえって「私」を励まし、そのスピリチュアルペインをやわらげてくれたのである。だからもう、生きてきた意味というような、答えのない問いを問い続ける必要はなく、生きるということただそれだけが重大事であると気づかされるのである。もはや死者としてあの世へさることにためらいはない。

一足先にさるの湯につかっていた丹野は、湯に足を入れた「私」を見て、「お、決めたの」と目を輝かせる。

「じきに照やんも来るよ」

「おれが居れば驚くな」

「目え丸くする」

丹野の言葉が嬉しかった。

今日までまった甲斐があったと思った。

私が初めて得た友人たちだ。³¹

今日までまって、「私」は初めて友人を得たのである。それは、「死者」である「私」が、他者との関係性、すなわち世界との関係性を回復した瞬間でもある。

さるの湯に入ってから後の、第 2 層の死世界がいかなるものであるかは分からない。ただ、この 2 人の会話から、彼らがあの世でも共にいるであろうことが推される。そしてあの世へと至る時、「母に抱かれて眠っていたとき」のような「温かさに包まれて、私は幸福だった」³² と感じた。「私」は、「きっと向こうでは私も別の私になれる」³³ と希望を抱くのだ。人を恨み、生きる意味を失い、父を殺し、自ら死を選んだ「おれ」・「私」のスピリチュアルペインはやわらいだのである。かくして、死者によるスピリチュアルケ

ア、字義通り「霊的ないやし」とでも呼ぶ他のない「スピリチュアルケア」の可能性が湧出するのである。

Ⅱ. 死者と生者の応答で生じるスピリチュアルペインのやわらぎ

『さるの湯』は癒す者も癒される者もともに死者であるという点で特異ではあるが、この世に未練を残して逝った亡者の妄念、執着、痛みや愛が、生者との邂逅によって霧消させられ、かつそれが生者のなぐさめにもなるような例（ためし）が、文学作品や伝承に散見される。上田秋成『雨月物語』の巻二『浅茅が宿』と、ラフカディオ・ハーンの『死人が帰ってきたはなし』を通して、スピリチュアルペインの顕れと、死者と生者との応答による痛みのやわらぎについて続けて考察していこう。

1. 『浅茅が宿』に見るスピリチュアルペインとそのケア、あるいは自縛のほどき

『浅茅が宿』は、15世紀中庸、室町時代を舞台にした上田秋成（1734-1809年）の怪異譚『雨月物語』の一篇である。

今の千葉県市川市の富裕な農夫、勝四郎は仕事を厭ううちに田畑を失い、親族からも疎まれるようになる。捲土重来を期す勝四郎は、美しき妻 宮木（みやぎ）の反対を押し切り、残りの田畑を売り払って絹に替え、京へと商いに上る。別れの日、心細い、早く帰ってくださいとすがる宮木に、勝四郎は「葛のうら葉のかへるは此秋なるべし。心づよく待ち給へ（葛の葉が翻るこの秋には帰ってくるよ。心丈夫にお待ちなさい）」³⁴と言い残し、旅立っていった。ところが直後、足利と上杉との戦が勃発して関東一円は大混乱となり、市川もまた戦場と化す。勝四郎は、京で首尾良く一儲けするが、戦乱の報に慌て帰郷する途次、山賊に身ぐるみ剥がされる。仕方もなく京に戻る折り、近江に入ったところで熱病に倒れてしまい、親切な金持ちの庇護で日々暮らすうち、約束の秋はあっという間に過ぎ去っていた。

乱世は長く続き、京は蔓延した流行病で死屍累々の惨状だ。勝四郎は、故郷に残した妻を思い、「たとへ泉下の人となりて、ありつる世にはあら

ずとも、其あとをももともとて塚をも築べけれと、人々に志を告て、五月雨のはれ間に手をわかちて、十日あまりを経て古郷に帰り着ぬ（たとえ亡くなっているとしても、消息をたずねて墓を建てようと、その思いをみなに話して、梅雨の晴れ間に別れを告げ、10日あまりでふるさとの市川にたどり着いた）」³⁵。このときまでに、実に夫婦の別れ暮らしは7年に及んでいた。

時は夕暮れ、辺り一面は荒廃の極みにあったが、それでも元の場所に勝四郎の家はひっそり建っており、人の気配もある。咳払いをすると、「誰」と問う声は年老いたようだが間違いなく宮木その人だ。「我こそ帰りまゐりたり。かはらで独自浅茅が原に住つることの不思議さよ（私が帰ってきたのだよ。それにしてもこのような浅い茅の生えた野っ原に一人で暮らしているとは、なんと不思議なことだろう）」³⁶。垢じみて目は落ちくぼみ、髪も乱れてかつての面影をなくした宮木は、さめざめと泣いている。勝四郎は宮木と別れてからの7年間のことを話し、宮木もまた、どんなに苦しく悲しい思いで待ちわびたかを訴えた後、「今は長き恨みもはればれとなりぬる事の喜しく侍り。逢を待間に恋死なんは人しらぬ恨みなるべし（今となっては恨む思いも失せて嬉しい限りです。お待ちする間に焦がれ死んでいたら、なんと悔しく情けないことだったでしょう）」³⁷と、また泣く。そして「夜は短いのだから」と、互いに慰め合いながら眠りにつくのだった。

長旅の疲れもあってぐっすり寝込んだ勝四郎が目覚めると、家には屋根もなく戸もない。妻の姿も見えず、朝露に袖はぐっしょり濡れそぼっている。周りを見回せば、荒れ果ててはいるが、確かに二人の暮らした家に間違いはない。さては狐狸のしわざか、それとも自分を慕う魂がいつとき帰ってきたものか。「我身ひとつは故（もと）の身にして」と思わず口をついて出た業平の歌³⁸。ふと見ると、昔寝室であったところの土が盛り上がって塚（墓）のようになっている。昨晚の霊はここからやってきたのか、と、何やら恐ろしくもあり、懐かしい思いもした。手桶の水を入れる桶の中には、確かに妻の筆になる歌が置かれている。「さりともと思ふ心にはから

れて／世にもけふまでいける命か（もしかしたら今晚帰ってくるかもしれない、明日の朝には帰ってくるに違いない。そんな思いにだまされてこれまで生きてきた命よ）」³⁹。その辞世の句には、希望を絶たれた宮木のスピリチュアルペインが凝集している。

妻の死が腑に落ちた勝四郎は、大声を上げて泣き崩れる。せめて宮木の死の年月とその様子を知りたいと訪ね歩いて、里に古くからいる翁に行き着いた。翁の話によると、勝四郎が必ず帰ると約束した秋が去って春が来て、その年の8月10日に亡くなったという。憐れに思った翁が土を運んで塚を作ったそうだ。5年前である。

戦乱の世にあって、人々が我がちに家を捨てて逃げ出す中、里の田畑は狐兎の草むらに変貌し、さらには樹神（こだま）などという恐ろしい鬼のすみかになりはてた。「秋までに」という夫の言葉をひたすら信じて待ちわびた「秋」はあっけなく過ぎ去って、寒い冬が訪れ、雪が溶け、春が来て、一日千秋の思いで待ちわびる宮木は徐々に衰弱していったのであろう。もはや死期を悟り、震える手で筆を握って、辞世の句をしたためる。その間にも、もしや夫が門口に立って咳払いをするかもしれぬ、明日の朝には帰るかもしれぬ、と思い願いながら……。かくて現世の命が途切れた後も、宮木は自らが死んだことも知らず、魂魄となって夫の帰りを待ち続けた。なぜ帰って来ない、なぜ便りはない、どこで何をしている、私がこんな切ない思いでいるのに。これもまた死者のスピリチュアルペインである。かくして、夫は帰った。恨みは「はればれとなり」「喜しく（うれしく）」にならない。宮木の痛みは、このとき霧消し、この世に縛り付けられた魂は自由になってあの世へと向かう用意を調えたのである。

戦乱や強盗、やまいといった不測の事態が重なったといえ、妻との約束を違えて無為に長の年月を過ごした勝四郎は、自らを激しく責めたであろう。もとより自分が仕事に精を出さなかったことに遠因はある。愛する者

を真実失った大きな悲嘆と罪悪感とで、勝四郎もまたスピリチュアルペインにとらわれているはずだ。「我が身一つはもとの身にして」と、思わず呟いたことも、戦乱を、疫病を、日常の不確かさを、世の無常を儚んだ思いのあらわれである。彼は、翁とともに妻の塚の前で声を上げて泣きながら、ひたすら念仏を唱えるのである。ただ今は打ちひしがれて泣くばかりの勝四郎ではあるが、夫の帰還に際して、「今は長き恨みもはればれとなりぬる事の喜しく侍り」と吐露した宮木の思いが、彼にとってもやがては痛みのやわらぎにつながっていくのではないだろうか、そう推される。

2. 『死人が帰って来たはなし』のスピリチュアルペインとそのケア、あるいは死者の共苦

ラフカディオ・ハーン⁴⁰（1850-1904年）の『死人が帰って来たはなし』は、来日後初の著作、『知られぬ日本の面影』（*Glimpses of Unfamiliar Japan*）のうち、第25章『幽霊と化け物について』の7節に収められた伝承である（『死人が帰って来たはなし』と呼び習わされている）。

ハーンが妻セツの養父・金十郎に「私はこれまで死人が帰って来る日本の話を澤山読んだり聞いたりして居る。〈……〉君から聞いたところから考へると、死人の帰って来るのは望ましい事ではない。つまり憎いから、妬ましいから、或は悲しくて落ちつけないから帰って来る。しかし悪意でなく帰って来る話は——どこかに書いてないかね」⁴¹と水を向けて聞き出した話がこれだ。

「昔、何とか名前は忘れたが或大名の時分にこの昔からの町に大層仲の好い男と女がありました」⁴²と金十郎は話し始める。

二人は幼い頃から結婚の約束をし、年を経ても互いを愛する思いは強くなるばかりであった。男は富裕な武士に仕え、「生きてゐたら、その日から一年以内に結婚するために許嫁の処へ帰って来ることを約束し」⁴³、戦場に赴いた。ところが1年経っても、2年経っても男は戻らない。男はも

はや死んだもの、そう絶望した女は命を落とす。一人娘に先立たれた両親は巡礼の旅に出るが、そのわずか4日後、件の男は無事に帰還を果たしたのである。女が死んだことを聞き知った男は、その墓の前で自尽しようと決心する。すると不意に「あなた」と呼ぶ声が聞こえ、やわらかな手が彼に触れる。振り向けば、幾分青ざめてはいるものの、昔通り美しい許嫁がニコニコして跪いている。

帰ってきた死人が愛する男の命をすんでのところで救うのである。女の言い分はこうだ。

私死んだと思はれて葬られましたの—早まって葬られましたの。それで両親も私を死んだものと早合点して巡礼に出ちまったのです。でも御覧の通り私死んぢゃありません。私です、疑っちゃいやですよ。そして私、あなたの心、よく分かりました、それで苦しんで待ってゐたかひがありました。⁴⁴

二人は町を出て、日蓮宗の名高い寺のある甲斐国身延村までたどり着く。ここで待っていれば必ず女の両親が巡礼に訪れ、家族はまた一つになれるだろう、と。二人は小さな食べ物屋を開き、やがて男の子にも恵まれて、つましいながらも満ち足りた生活を送る。ところでその子が1歳2ヵ月になった時、女の両親が案の定巡礼にやってきて、二人が営む食べ物屋に立ち寄ったのである。思いもよらぬ再会にただ驚く両親を、男が奥へと連れて行くと……。子どもはいたが、女の姿がない。ただ確かに今し方まで男の子を抱きながら身体を休めていたかのように、枕がほんのり温かいのである。やがて、「母と子供を蔽ふてあつた蒲団の下に、以前妙高寺に預けて置いた覚えのある物—死んだ娘の位牌—を発見した時に始めて、彼らはさとりました」⁴⁵。

この物語において、死んだ女は亡霊となって男と再会するにとどまらな

い。実体化して、2年もの間、男と一緒に店を切り盛りし、男の子までもうけるのである。

この話を聞き終わって考え込んだ様子のハーンに、金十郎が「多分、旦那はこの話をばかばかしいとお考へなさるでせう」と声を掛ける。ハーンは、「いや、金十郎さん、この話は私の胸にこたへました」と応じるのである。

事の経緯は、『浅茅が宿』と似ている。二人の男はともに愛する女としばし別れて暮らし、故あって約束の期日までには戻れなかった。宮木はたった一人、必死に貞操を守りながら、荒れ放題に荒れ果てて狐兎の草むらと化した浅茅が原で時を過ごし、一方の女は両親に愛でられつつも、ひねもす男のことを思い暮らして悲嘆に暮れる。やがて共に衰えて、現世の命潰えるのである。

女も男も戦争や流行病という、自分ではどうすることもできない巨大な力に翻弄され、間近で支え合うべき愛する人とも離れ暮らす。女たちは今日戻るか、明日には来るかと待ちわびながら、やがて絶望して死に到る。その無念、諦念、言いしれぬ痛み、そして死してなお思人に会いたいという切実な願いが、彼女らをして亡霊となさしめる。

女と男はついに再びまみえるが、一方は亡者であり、また一方は生者である。宮木は「今は長き恨みもはればれとなりぬる事の喜しく侍り」と号泣（よよと泣き）し、女は自分の墓前で命を絶とうとする男に対し、「私、あなたの心、よく分かりました。それで苦しんで待つていたかひがありました」と言う。恨みは晴れ、苦しみは報われ、喜びが訪れる。死してなお長きにわたった女たちを苛むスピリチュアルペインは、ここにやわらぐのである。

そして一方の男たちもまた、愛する人との再会に喜び、やがてその死していることを知り、永訣を歎じ、改めて亡き妻への思いを深くする。

『死人が帰ってきたはなし』の場合、再会を果たした女がよしんば死人

であると知ったならば、男は、墓前でそうしたように、再び自死を望んだのではないか。だから女は、2年もの間、父母の来るのを待って、現実存在し、子までもうけて男と暮らし続けたのだ。ついに両親と出会い、もう決して男が自ら死することはない、子どもも元気に育ってくれるだろう、そう確信したから、女はあの世へ向かうことを得たのである。死してなお男を思いやる亡者の気持ちは痛切である。逆説的ではあるが、その「ものこと」に対する凄烈な思い——それを愛と呼ぶか、執着とするかは別として——がなければ、よしんば失ったとて痛みはない。思いが強ければ強いほど、痛みもまた強い。男にその強い思いは届いたはずである。

霊的なものによる慰謝が、愛する人との死別の悲嘆をやわらげる。それは死を体験した者、すでにして人ではない者、いわば超越的なものによるなぐさめであり、克服し得ぬスピリチュアペインを痛んで逝った者から生者への、共感共苦のメッセージである、とも考えられるだろう。

愛する人に、今一度会いたい。その思いは生者にとっても同様である。たとえ亡霊であっても、相まみえたい。その人のことを感じたい。生者が抱く強い悲嘆、喪失感から来るスピリチュアルペインは時を経ても消えることはないかもしれない。しかし、愛する死者の魂を感得することが、そのやわらぎにつながるということを、不思議な怪談物語は示唆してくれる。それは、死者と生者の応答というスピリチュアルケアのありようである。

おわりに

死者が生者のもとに戻る現象は、虚構世界にのみ見られるものではない。現実世界でも頻繁に報告されている。たとえば東日本大震災の後、大きな被害を受けた地域で霊の目撃談が後を絶たなかった。

東北学院大学の金菱清ゼミナールでは、学部生を中心とした「震災死」に関する出版プロジェクト、『震災の記録プロジェクト』を実施したが、その中で工藤は『死者たちが通う街—タクシードライバーの幽霊現象』の題で、宮城県石巻・気仙沼のタクシードライバーに数多く見られた幽霊目

撃談を収集分析した⁴⁶。工藤は、突如として命を絶たれた人々の無念ややりきれない思いを伝えるのに最適の空間としてタクシーが選ばれ、また自ら身内を失い、あるいは友人を亡くした被災地のタクシードライバーも、畏敬の念を持って霊魂、幽霊現象を受け入れている、と考察する。

2013年8月23日放送のNHKスペシャル『シリーズ東日本大震災 亡き人との“再会”～被災地 三度目の夏に～』では、生者と死者との応答が多く報告されている。祖母が濁流に流され、自分だけが生き残った人が「なぜ自分だけ生かされたのか、なぜ死ねなかったのか」と考えてばかりいると、ある夜、祖母が枕元に鮮明な姿で現れ、微笑んだという。その人は「穏やかな表情に救われた。おばあちゃんのためにもしっかり生きていかないと」と思うようになった。また3歳の息子を亡くした母親は、すぐそばで愛息の遊ぶ気配を感じた。「こっちで食べなよ」と声を掛けると、動くはずないアンパンマンのおもちゃが音を立てて動き出した。1歳と0歳の息子と妻とを一度に失った父親は、それから3年目のある晩寝ていると、トントン肩を叩かれた。見ると、3歳と1歳になった2人の息子と女の子が立っていた。「長男が『パパ、大丈夫だからね』と励ましてくれ、二男は無邪気に笑っていた」と父親は話す。それ以来、家族がいつも見ていて、ともに暮らしているように感じるようになったと言う。これらを「ばかばかしい話」と片付けることはできようか。ハーンが義父に返したように、「胸にこたへ」るのではないだろうか。

岩手県大槌町の高台に「風の電話」がある。訪なう人は電話ボックスに入ると、受話器を上げて、亡き人に語りかけ、亡き人の声を聴こうとする。もちろん電話回線はない。ある人は、「これまでに4回訪れた。『何も見えない。何も聞こえない。だけど、電話口の向こうにあの人がいるような気がする』」⁴⁷と、そう応えている。

死後の世界を私たちは知り得ない。死者となった大切な人は、決して戻って来ないだろう。怪談は、しかし、そのような現実世界の限界を軽々と超越し、死者と生者を結びつける。「もう一度会いたい」「あなたはどこにい

るのか」という問いかけに、霊の顕れという現象を通し、直截に伝えてくれる。震災後に多く見られた霊的体験も、また『さるの湯』や、『浅茅が宿』、『死人が帰ってきた話』のような怪談物語も、生きて苦しむ人たちへのスピリチュアルケアであり、祈りの体現といえるのではないだろうか。

注

- 1 本節（はじめに）のスピリチュアルペインに関する説明は、筆者による2017年本誌掲載論文（「文学作品に見るスピリチュアルペインの顕れ——死によってのみやわらぎ得るスピリチュアルペイン：芥川龍之介の『歯車』を手がかりに——」）と一部重複する。
- 2 Saunders, Dame Cicely (1984), *The philosophy of terminal care*, Saunders, Dame Cicely Ed., *The Management of Terminal Malignant Disease* (2nd ed.), Edward Arnold, p.232.
- 3 Gauguin, Eugène Henri Paul (1897-1898), *D'où venons-nous ? Que sommes-nous ? Où allons-nous ?*, oil on canvas, 131.1 × 374.6cm, Museum of Fine Arts, Boston.
- 4 小林和夫(2017年)「文学作品に見るスピリチュアルペインの顕れ——死によってのみやわらぎ得るスピリチュアルペイン：芥川龍之介の『歯車』を手がかりに——」立教大学キリスト教教育研究所『キリスト教教育研究』35号。
- 5 本論は、立教大学大学院キリスト教学研究科ゼミナール『キリスト教倫理学研究(2018年春)』（主宰：梅澤弓子教授）における筆者発表内容に想を得て執筆した。
- 6 高橋克彦(2015年)「さるの湯」道又力編『東日本大震災鎮魂岩手県出身作家短篇集』岩手日報社、6-38頁。
- 7 道又力(2015年)「あとかき」『あの日から 東日本大震災鎮魂岩手県

- 出身作家短編集』岩手日報社、488-489 頁。
- 8 2021 年 3 月 1 日、警察庁まとめ。
 - 9 2020 年 12 月 25 日発表、復興庁 東日本大震災における震災関連死の死者数（令和 2 年 9 月 30 日現在調査結果）より
 - 10 道又『あの日から』、489 頁。
 - 11 同上。
 - 12 高橋克彦（2015 年）「さるの湯」『あの日から 東日本大震災鎮魂岩手県出身作家短編集』岩手日報社、7 頁。
 - 13 同書、9 頁。
 - 14 同書、14 頁。
 - 15 同上。
 - 16 同書、15 頁。
 - 17 同書、7 頁。
 - 18 道又力編（2000 年）「小伝 作家になるまで」『開封 高橋克彦』平凡社、132-147 頁。
 - 19 同書、131-132 頁。
 - 20 前掲書、12 頁。
 - 21 同書 16 頁。
 - 22 同書 19-21 頁。
 - 23 同書、24 頁。
 - 24 同書、27 頁。
 - 25 同書、33 頁。
 - 26 同書、36 頁。
 - 27 同書、37-38 頁。
 - 28 同書、21 頁。
 - 29 同書、16 頁。
 - 30 同書、37 頁。
 - 31 同書、38 頁。

- 32 同上。
- 33 同上。
- 34 上田秋成（2009 年）『雨月物語精読（稲田篤信編著）』勉誠出版、40 頁。
- 35 同書、44 頁。
- 36 同書、45 頁。
- 37 同書、47 頁。
- 38 久曾神昇全訳注（1982 年）『古今和歌集（三）』講談社、256 頁に在原業平朝臣の歌、「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」の歌意は、「この月は昔の月と違うのであるか、否、昔のままの月である。この春は昔のままの春と違うのであるか。否、昔のままの春である。そして、私一人だけは昔のままの身であって（今年は相手の女性がないのがまことに遺憾である）」と訳されている。
- 39 前掲書、48 頁。
- 40 1896 年に日本国籍を取得し、小泉八雲と名乗る。
- 41 小泉八雲（1926 年）「知られぬ日本の面影」『小泉八雲全集 第三巻』第一書房、828 頁。
- 42 同書、829 頁。
- 43 同書、829-830 頁。
- 44 同書、831-832 頁。
- 45 同書、833 頁。
- 46 工藤優花（2016 年）「死者たちが通う街—タクシードライバーの幽霊現象」『呼び覚まされる霊性の震災学 3.11 生と死のはざままで（金菱清ゼミナール編）』新曜社。
- 47 河北新報社編集局編（2016 年）「(3) 風の電話に語り 聴く／受話器の向こう あの人がある」『挽歌の宛先 祈りと震災』公人の友社。

（JICE 研究員）